



乳幼児健診マニュアル 第5版

福岡地区小児科医会 乳幼児保健委員会 編

●B5・頁160 2015年
定価：本体3,200円＋税
[ISBN978-4-260-02158-6]医学書院刊

小児科医は子どもの総合医です。小児科医を長年やってきて、他の診療科の医師、とりわけ内科医と比べると、小児科医は臓器別ではなく子どもに関するすべての問題に対応しようとする姿勢が鮮明に記憶に残っています。では、他の診療科の医師にはできない小児科の究極の専門性はどこにあるのでしょうか？

子どもの感染症への予防・対応と発達への評価・対応の2つの点に、小児科医の独自性が強く表れると私は考えます。

子どもの感染症への予防・対応の点で、大きな変化が生じています。これまで先進諸国に比べてずいぶん遅れていたわが国の予防接種体制も、近年少しずつ改善されてきました。その結果、わが国の子どもの疾病構造にきわめて大きな変化が生じています。b型インフルエンザ桿菌による細菌性髄膜炎、敗血症、中耳炎、股関節炎などが激減し、ロタウイルスが原因となる下痢嘔吐症による入院治療が必要な脱水症患者も減少しています。小児に比較的多く見られる感染症への対策においては、発症前の予防や重症化の軽減のほうが発症後の治療よりも有効であることが証明されつつあります。

一方、子どものこころと体の発達を適切に評価し、問題点を探し出して的確に対応し、子どもの発達に関する養育者の不安にも適切に対応することは小児科医としての基本で、小児科医にしかできない仕事です。これまでに子どもの発達評価を含めた健診についてさまざまな解説書が出されてきましたが、日本小児科学

会として乳幼児健診の仕方を標準化するには至っていませんでした。そのため、日本小児科学会は日本小児科医会や日本小児保健協会と協力して、2年ほど前から乳幼児健診の標準化を目指した合同委員会を立ち上げ、年2回の頻度で乳幼児健診に関する講習会を日本各地で開催しています。

このたび、福岡地区小児科医会 乳幼児保健委員会が『乳幼児健診マニュアル 第5版』を刊行されました。すでに30年ほど前に作成された『乳児健診マニュアル』を定期的に改訂された集大成がこの第5版です。

本書では乳幼児健診を担当する医療関係者の心構えが初めに記載され、健診の手順や月齢別の健診の仕方が大変わかりやすく解説されています。

乳幼児健診では、明らかになった子どもの健康問題にこれからどのように対応するのかを親御さんに説明することが最も重要です。さらに、親御さんの不安を取り除くことも大切です。的確で温かな思いやりにあふれた指導をするために必要な小児保健と小児医療の知識が、育児相談・育児支援の項目で具体的にわかりやすく記載されていることが本書の最大の特徴です。さらに、最近増えている発達障害が疑われる子どもの診かたと初期対応についても、とても丁寧に記載されています。

本書は乳幼児健診を担当する医療関係者に参考になる本であり、多くの医療関係者に健診の場で大いに利用していただきたいと思います。